

無形文化財（工芸技術・陶芸）

名称・員数 吉向焼（一件）

保持者の住所 大阪府交野市私市八丁目二十五番六号

保持者の氏名 吉向孝造（九世吉向松月） 一名

吉向焼の歴史

吉向焼の創始者 治兵衛は伊予国大洲藩で生まれ、身内に砥部焼職人を持つ環境で育った。陶工になるため二十歳前後で京都へ旅立ち、京都樂家での修業後、大坂十三村（現、大阪市淀川区十三本町一丁目）に最初の窯を築いている。第十一代將軍徳川家斉の慶事に型作りで制作した鶴・亀の食籠と金魚鉢を献上し、下賜品として「吉向姓」と「金・銀印」を拝領したのち、諸藩からお庭焼の指導に招聘されている。

初代が残した多くの作品を検証すると、陶器の他に磁器も見受けられる。陶器は修業先の樂家、磁器は、出身地の砥部焼の影響のもと清水焼から学んだものと思われる。治兵衛の作品をみると、求められるものに応じて陶器・磁器の制作をしていたのではない

かと思われる。

多忙な吉向治兵衛に代わり、窯を守り続けたのは初代以降の後継者である。二代帯屋亀治、三代與右衛門、四代治平と続く。五代目継承時に「吉向十三軒」（現在 東大阪市）と「吉向松月」（現在 交野市私市）の二家に分かれた。その間、窯は明治一八年（一八八五）に大阪市上本町七丁目、明治二四年（一八九一）には大阪府大阪市中央区高津一丁目の高津神社境内に転窯している。

五代目以降の「吉向松月」は、窯場を大阪府枚方市岡山手に移し、ここでは立地の傾斜を利用して登り窯を築き、磁器を焼いている。五代・六代では、大阪文人との交流も旺盛で、画人の他に詩人、俳人、歌人、喜劇役者、落語家などとの縁が深い。これら文化人のサロン「達磨会」を設立、ゆかりのあるものをモチーフにした焼き物や、絵画、俳句など密なつながりを示す諸先生の作品を多く残している。特に、日本画家の菅楯彦・生田花朝女との関係性は色濃く、菅楯彦作の窯工房の様子を描いた二曲一隻の屏風絵は吉向松月窯に大切に保管残されている。

初代吉向治兵衛の残した足跡は大きく、特に吉向焼の最大の特徴である、青釉（緑釉）を主とした色釉、手びねりで作る楽風の茶盃、鶴・亀などの彫塑を得意とする陶技は後世の当主に受け継がれている。

無形文化財・吉向焼

現在、茶道具を中心に軟質施釉陶器を制作する吉向松月窯のうち、手びねりによる楽茶碗制作においては土玉から手びねりで作るという成形方法を初代から現在まで守り続けている。使用する土は、シャモット・硅砂・蛙目・木節粘土の4種類の材料を独自にブレンドしている。硅砂を入れると土は丈夫になるのであるが逆によく締まる。シャモット（素焼の粉）を入れることでひずみを少なくし、木節粘土で陶器寄りの焼き物になるよう工夫している。調合する割合を設定することで土の質が変わらない陶器を焼くということに力を注いできたのである。

焼成方法は、九世吉向松月氏が江戸時代の技法を伝承し、一番こだわった点である。赤楽茶盃では、薪をくべる低火度の軟質施

釉陶器の桶窯を用い、黒楽茶盃では轆窯を使う。大坂城の発掘調査で、堂島の蔵屋敷跡から桶窯を含む窯跡が発見されている。桶窯は地上式なので発掘調査で見つけることは稀であるが、千利休が楽焼の長次郎に茶碗を作らせた同時期に、京都以外の地で窯跡が発見されたことは、初期の楽焼の多様性・多源性を示している。

明治四五年、枚方市から交野市へ移住した際、赤楽の窯変窯を完成させた。赤楽の「窯変」というのは、成形した粘土の上に赤土（伏見の黄土）を塗って、素焼き時に薪と炭で黒色を付けることをいう。窯内は2段構造になっており、上段の蓋はカワラケを鱗状に屋根のように積み上げ、炎が中心に寄集するしくみを作り、薪が重なり合うようにすることで、還元に近い倒焰系になるよう工夫している。カワラケの積み方では吉向松月窯独自の工夫がみられるが、焼成方法は基本的にはほかの赤楽窯や土器窯に類する。対して、黒楽の轆窯は、内窯に一個ずつ作品を入れ、三〇分ほどかけて温度を上げていく焼き方である。火の勢いを見ながらタイミングを見計らって火鉢みで取り出す、焼き物師としての経験と勘が大いに作用するやり方である。取り出した茶盃には鉢み跡が付くため、どの形式の窯でどう焼いたものなのかを判別することが出来る。

茶碗作りに欠かせない釉薬については、京都の加茂川で採れる加茂川石を使用する。気泡を含んでいることで厚みがあり、高温で膨らんだ後冷めると「柚子肌」になる。一般的にこの手触りになるのが良い茶盃といわれている。

吉向松月窯が轆轤での焼成にこだわるのは、先代からの教えである茶道の精神や、吉向家に伝わる極意を込めた茶盃作りを心にかけているからである。抹茶を点てるために作られた楽茶碗は、器を作ることが最高のもてなしとされる。交野市に工房を設けて六年後、轆轤を復活させたのも、この教えに起因している。

昭和五四年（一九七九）に大阪府枚方市から交野市へ完全移住し、私市に「吉向松月窯」を築いたのは、正倉院宝物の奈良三彩の土は交野の、特に私市で採れる土の可能性が一番高いという理由からである。

楽焼は従来鉛による低火度の釉薬であるが、吉向焼の特色といえる緑の色を、過去では銅版工場から銅版の錆（緑青）の粉を集めて緑釉を作っていたという。しかし、九世は健康を害するこのやり方を改め、平成三年（一九九一）から新しい緑釉の無鉛化研究に取り組み始め、ようやく初代の緑釉の色彩の復元に成功して

いる。

そして、文政一〇年（一八二七）に、当時の將軍徳川家斉に鶴と亀の食籠を献上したが、この陶器制作に用いる型作り技法も、当時の型ともに吉向松月窯において伝わっている。土型は、土で作った型に土台となる粘土を押し付けて成型することで、同じ型の焼物を効率よく複数個作ることができる。その後、明治時代に石膏という素材が陶磁器分野で使われ始めたことで、吉向焼でも昭和初期に石膏型に移行していった。型は土型の他に木型もあり、江戸時代では重箱や扇面の器を作る時に使用していた。今日、吉向松月窯において型づくりに用いられる型は石膏が主流であるが、初代が須坂藩のお庭焼時に用いたと伝わる鶴の土型は、吉向松月窯に残されている。

以上のことをまとめると、無形文化財の吉向焼とは江戸時代から続く軟質施釉陶器製造技法であり、①吉向焼独自の粘土の使用、②手びねりと型づくり、③低下度での施釉の3つが主たる指定のための条件である。

土作り



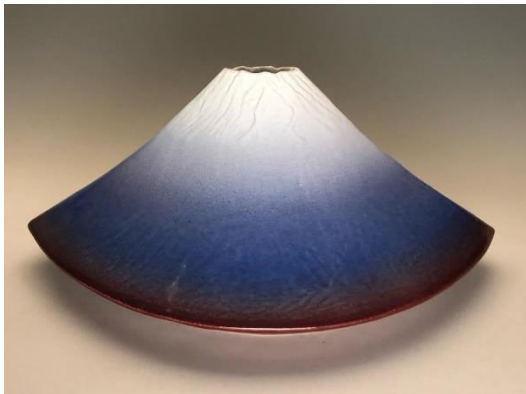
手びねり



型づくり



低火度施釉



無形文化財保持候補者の略歴

吉向孝造（九世吉向松月）氏は昭和二九年（一九五四）大阪府枚方市に生まれた。幼少の頃から家業である焼き物師の仕事を見て育ち、大阪芸術大学を卒業後は父・七世吉向松月（蕃斎）のもとで修業を続ける。枚方市の工房では、桶窯や登り窯での焼成を手伝うかたわら、作陶にも励んだ。氏の作品は大学卒業後の翌年大阪工芸展に出品、以後毎年入選し続けるなど、この頃から高い評価を得ている。

絵画にも造形が深い吉向氏は、日本画は山本紅雲、水墨画は直原玉青について学び、画人としての才を花器や水指などの制作に反映させている。

大学卒業五年後には、自身初の個展を大阪三越百貨店で開催、平成二〇年（二〇〇八）に九世吉向松月の襲名展、平成二九年（二〇一七）に大阪高島屋、令和四年（二〇二二）に日本橋三越本店にて個展を開いている。

吉向松月窯では、開窯後二〇〇年も続く家業を継承していくために、蛙目粘土・木節粘土・硅砂・シャモットの四種の粘土調査を独自に開発したほか、先代が書き記した釉薬調査を基に少しずつ割合を変動させながら、吉向焼独自の調査を完成させている。

しかしながら、初代が得意とした青釉（緑釉）の鮮やかな緑色は鉛白によるものであり、現在は使用が難しい。そのため現在では無鉛釉に酸化銅やクロムなどを混ぜて、くすみや味わいのある色をだしている。この研究・試作に十五年の歳月を費やし、平成二十一年（二〇〇九）に漸く当時の緑色に近い緑釉を作り出すことに成功し現在に至っている。

歴代の中で、九世の吉向孝造氏は伝統的な吉向松月窯における型物や手びねりなどの軟質施釉陶器製造の伝統技法を保持しつつ、この他にも様々な研究開発に取り組んでいる。その分野は数多く、化粧土や低火度色釉による新しい鑑賞美術陶器（風景をモチーフにした陶額や花器）などがある。また、従来の詫び・寂びの世界観を表現した茶碗の形状に捕われず、色・デザインにテーマ性を持たせた新しい形の茶道具作品を制作している。茶道具のすべて

において陶器で作れるものは作り、それは陶器制作者の開催する茶会において、毎年披露されている。

作品を制作するうえで独創的なデザインやフォルムを成形する手助けとなるのが道具である。ケズリ仕上げ用の曲りガンナや中取り用のナイフ、面取り用の弓、竹櫛など使用する道具は、すべて手製のものである。これらの道具は、新調したものや、初代の頃からそのままの状態で現在も使用しているものがあり、このような使い方は他の窯元ではあまり見られない。

吉向孝造氏は、大阪の産業文化の功労者として平成一八年（二〇〇六）に府知事の表彰を受けている。また、近年では毎年三月に行う桶窯の窯焚きで作陶体験と一般見学会を開催、市内小学校での陶芸学習指導、一般の陶芸教室やお茶会を行うなど積極的に文化の普及に努めている。一方で、国内だけではなく、平成一八年（二〇〇六）韓国のソウルで行われた美術文化交流展をはじめ、翌年には韓国全羅南道での枚方市民交流展、平成二二年（二〇一〇）年の韓国テグでの茶文化世界祭に招待作品を出品、平成二七年（二〇一五）には中国景德鎮での世界陶磁博覧会の茶文化部門

に招待参加するなど、国際交流にも力を入れている。

令和四年（二〇二二）に大阪堺南宗寺管長田島碩應老師より「興斎」の号を賜った。

無形文化財保持候補者の主な履歴

会員 枚方工芸会会員 一九六八年～現在

大阪工芸協会会員 一九七八年～現在

東洋陶磁学会会員 一九九九年～現在

役職 大阪工芸協会理事 二〇〇二年～二〇一七年

枚方工芸会会長 二〇一五年～現在

枚方美術運営協議会委員 二〇一一年七月～

二〇二二年六月

講師 枚方市御殿山美術センター 一九九〇年～現在

陶芸指導 交野市立私市小学校五年生 二〇〇一年～現在

枚方市御殿山美術センター

交野市体育文化協会生涯学習大学

一九九四年～一九九八年



吉向孝造氏

受賞

大阪府産業文化功労表彰 一九九五年
大阪府知事表彰 二〇〇六年

審査員

茨木市市展 二〇一六年
泉大津市市展 二〇一九年～二〇二〇年
堺市市展 二〇二一年～二〇二二年
枚方市市展 二〇二二年～二〇二四年



赤楽



三彩



黒楽



緑釉（初代の「緑」復元）

指定を行いたい理由

吉向焼は、愛媛県の砥部焼職人の家庭で育った初代の治兵衛が、京都樂家での修業後、享和四年（一八〇四）に現在の大阪市淀川区十三本町にて最初の開窯したことが始まりである。その後、各地の大名屋敷内にてお庭焼きとして、主に茶道具などの軟質施釉陶器を焼いたことで高く評価されはじめる。

文政一〇年（一八二七）には、將軍・徳川家斉へ、鶴と亀の食籠を献上して以後、「吉向」を名乗るようになった。現在も、その契機となった型づくりによる陶器製造や、低火度による施釉手法など伝統的な技術を保持している。吉向焼の釉薬の中でも緑釉が最大の特徴である。

そのほか、黒楽や赤楽などの茶碗の製造は、楽焼伝統の手びねりにより行い、その焼成にあたっては、黒楽が轆窯、赤楽が桶窯など、江戸時代以来の窯を構築して行っている。

吉向窯は十三で開窯の後、大阪市内を二度転窯し、明治四五年（一九一二）には枚方市岡山手、昭和五四年（一九七九）には交野市私市に転窯をしている。なお、明治三四年（一八九一）には吉向松月窯と吉向十三軒に窯が分かれ、吉向十三軒は現在東大阪市に開窯している。

今日の吉向焼は、軟質施釉陶器という伝統的な陶器製造技法を保持しつつ、初代以来、創意工夫が加えられ、高度な芸術的表現を可能にする陶芸技法として高く評価されている。そして、伝統的な原材料及びその用法や製作技法が継承された上に、更なる九世による創意工夫が加えられ、表現の幅が広がっている。

以上のように、吉向焼は芸術上価値が高く、又は市の工芸史上重要な地位を占め、かつ、地域的特色が顕著な工芸技術として極めて重要である。また、その技法を継承している吉向孝造氏（9世）は、この工芸技術を正しく体得し、かつ、これに精通しており、吉向焼という軟質施釉陶器という伝統技法を伝承するには必要な人物である。

よって、交野市指定文化財（無形文化財）に吉向焼を、その保持者として吉向孝造氏を指定したい。